

或敵打の話

芥川龍之介

青空文庫

発端

肥後の細川家の家中に、田岡甚太夫と云う侍がいた。これは以前日向の伊藤家の浪人であつたが、当時細川家の番頭に陞つていた内藤三左衛門の推薦で、新知百五十石に召し出されたのであつた。

ところが寛文七年の春、家中の武芸の仕合があつた時、彼は表芸の槍術で、相手になつた侍を六人まで突き倒した。その仕合には、越中守綱利自身も、老職一同と共に臨んでいたが、余り甚太夫の槍が見事なので、さらに劍術の仕合をも所

よもう望もちした。甚太夫は竹刀しなたいを執とつて、また三人の侍を打ち据えた。四人目には家中の若侍に、新陰流しんかげりゆうの劍術を指南せぬましている。沼兵衛ひょうえが相手になつた。甚太夫は指南番の面目めんぼくを思つて、兵衛に勝を譲ろうと思つた。が、勝を譲つたと云う事が、心あるものには分るように、手際よく負けたいと云う気もないではなかつた。兵衛は甚太夫と立合いながら、そう云う心もちを直覺すると、急に相手が憎にくくなつた。そこで甚太夫がわざと受太刀うけだちになつた時、奮然と一本突きを入れた。甚太夫は強く喉のどを突かれて、仰向あおむけにそこへ倒れてしまった。その容子ようすがいかにも見苦しかつた。綱つな利しは彼の槍術を賞しながら、この勝負があつた後は、甚不興はなはだきようげ気けな顔をしたまま、一言いちごんも彼を犒ねぎらわなかつた。

甚太夫の負けざまは、間もなく蔭かげぐち口の的てきになつた。「甚太夫は戦場へ出て、槍の柄を切り折られたら何とする。可哀かわいや剣術は竹刀しなひさえ、一人前には使えないそうな。」——こんな噂うわさが誰云うとなく、たちまち家かちゆう中に広まつたのであつた。それには勿論同輩しつとの嫉妬せんぼうや羨望まじも交つていた。が、彼を推挙ないとうさんざえもした内藤三左衛門んの身になつて見ると、綱利の手前へ対しても黙つている訳には行かなかつた。そこで彼は甚太夫を呼んで、「ああ云う見苦しい負を取られては、拙者の眼がね違いばかりではすまされぬ。改めて三本勝負を致されるか、それとも拙者が殿への申訳けに切腹しようか。」とまで激語した。家中の噂を聞き流していたのでは、甚太夫も武士が立たなかつた。彼はすぐに三左衛門の意を帯して、

改めて指南番瀬せぬまひょうえ沼兵衛と三本勝負をしたいと云う願書ねがいしよを出した。

日ならず二人は綱利の前で、晴れの仕合しあいをする事になった。始はじめは甚太夫が兵衛の小手こてを打った。二度目は兵衛が甚太夫の面めんを打った。が、三度目にはまた甚太夫が、したたか兵衛の小手を打った。綱利は甚太夫を賞するため、五十石こくの加増を命じた。兵衛は蚯蚓腫みみずばれになった腕を撫なでながら、悄悄すずすずこ々綱利の前を退いた。それから三四日経ったある雨の夜、加納平太郎かのうへいたろうと云う同家かちゆ中の侍うが、西岸寺さいがんじの堀外へいそとで暗打ちに遇あった。平太郎は知行ちぎよう二百石の側役そばやくで、算筆さんびつに達した老人であつたが、平生へいぜいの行状から推して見ても、恨うらみを受けるような人物では決してなかつ

た。が、翌日瀬沼兵衛の逐天ちくてんした事が知れると共に、始めてその敵かたきが明かになった。甚太夫と平太郎とは、年輩こそかなり違っていたが、背恰好せいかっこうはよく似寄っていた。その上定じようもん紋もんは二人とも、同じ丸に抱だき明姜みょうがであった。兵衛はまず供の仲ちゆうげん間まが、雨の夜路を照らしている提灯ちようちんの紋もんに欺あざむかれ、それから合羽かつぱに傘かさをかざした平太郎の姿に欺あざむかれて、粗忽そこつにもこの老人を甚太夫と誤あやつて殺したのであった。

平太郎には当時十七歳の、求馬もとめと云う嫡子ちやくしがあつた。求馬は早速公おおやの許ゆるしを得て、江越喜三郎えごしきさぶろうと云う若党と共に、当時の武士の習慣通り、敵かたき打うちの旅のぼに上る事になった。甚太夫は平太郎の死に責任の感まぬかを免れなかつたのか、彼もまた後見うしろみのために旅立

ちたい旨を申し出でた。と同時に求馬と念友ねんゆうの約があつた、津崎つぎさき左近さこんと云う侍も、同じく助太刀すけだちの儀を願ひ出した。綱利は奇き特どくの事とあつて、甚太夫の願は許したが、左近の云い分は取り上げなかつた。

求馬は甚太夫喜三郎の二人と共に、父平太郎の初七日しよなぬかをすますと、もう暖国の桜は散り過ぎた熊本くまもとの城下を後にした。

一

津崎左近つぎさきさこんは助太刀すけだちの請こいを却しりぞけられると、二三日家に閉じこもつていた。兼ねて求馬もとめと取換した起請文きしやうもんの面おもてを反故ほごにするのが、

いかにも彼にはつらく思われた。のみならず朋輩ほうばいたちに、後うしろ指ゆびをさされはしないかと云う、懸念けねんも満更まんげないではなかつた。が、それにも増して堪え難かつたのは、念友ねんゆうの求馬もとまを唯一人ひとり甚じ太夫ただゆうに託すと云う事であつた。そこで彼は敵かたきうち打うちの一行いっこうが熊本の城下を離れた夜よ、とうとう一封の書を家に遺して、彼等の後あとを慕あこがうべく、双親ふたおやにも告げず家出をした。

彼は国境くにざかいを離れると、すぐに一行に追いついた。一行はその時、ある山駅さんえきの茶店ちあてんに足を休めていた。左近はまず甚太夫の前まへへ手をつきながら、幾重いくえにも同道を懇願こんがんした。甚太夫は始はじめは苦くる々がしげに、「身どもの武道では心もとないと御思ごいか。」と、容易よういに承うけ引く色を示さなかつた。が、しまいには彼も我がを折おつ

て、求馬の顔を尻眼にかけながら、喜三郎の取りなしを機会しおにして、左近の同道を承諾した。まだ前髪まえがみの残っている、女のよひりきうな非力の求馬は、左近をも一行に加えたい気色けしきを隠す事が出来なかつたのであつた。左近は喜びの余り眼に涙を浮べて、喜三郎にさえ何度となく礼の言葉を繰返くりかえしていた。

一行四人は兵衛ひょうえの妹いもうとむこ 壻あさのけが浅野家の家中にある事を知つていたから、まず文字もじが関せきの瀬戸せとを渡つて、中国街ちゆうごくかいどう道をはるばると広島ひろしまの城下まで上つて行つた。が、そこに滞在して、敵かたきの在あ処りかを探る内に、家中さむらいの侍の家へ出入でいりする女の針立はりたての世間話から、兵衛は一度広島へ来て後のち、妹壻の知るべがある予州松山よしゆうまつやまへ密々ひひに旅立つたと云う事がわかつた。そこで敵打の一行はすぐに伊

予船よぶねの便びんを求めて、寛文七年かんぶんの夏の最中もなか、恙つつがなく松山の城下へ
 はいった。

松山に渡った一行は、毎日編笠あみがさを深くして、敵の行方ゆくえを探し
 て歩いた。しかし兵衛も用心が厳しいと見えて、容易あたらわに在処あちを露
 さなかつた。一度左近が兵衛らしい梵論子ぼろんじの姿に目をつけて、い
 ろいろ探りを入れて見たが、結局何の由縁ゆかりもない他人だと云う事
 が明かになった。その内にもう秋風が立つて、城下の屋敷町の武
 者窓の外には、溝を塞ふさいでいた藻もの下から、追ひ追ひ水の色が拡
 がつて来た。それにつれて一行の心には、だんだん焦燥の念が動
 き出した。殊に左近は出合うかがいをあせて、ほとんど昼夜の嫌いな
 く、松山の内外うかがを窺うかがつて歩いた。敵打しよだちの初太刀は自分が打ちたい。

万一甚太夫に遅れては、主親しゅうおやをも捨てて一行に加わった、武士たる自分の面目めんぼくが立たぬ。——彼はこう心の内に、堅く思いつめていたのであった。

松山へ来てから一月ふたつき余り後、左近はその甲斐かいがあつて、ある日城下に近い海岸を通りかかると、忍駕籠しのびかごにつき添うた二人の若党が、漁師たちを急がせて、舟を仕立てているのに遇あつた。やがて舟の仕度が出来たと見えて、駕籠かごの中の侍が外へ出た。侍はすぐに編笠をかぶつたが、ちらりと見た顔かお貌かたちは瀬沼兵衛まぎに紛れなかつた。左近は一瞬間ためらつた。ここに求馬が居合せないのは、返えす返えすも残念である。が、今兵衛を打たなければ、またどこかへ立ち退のいてしまう。しかも海路を立ち退くとあれば、

行く方ゆえをつき止める事も出来ないのに違いない。これは自分一人でも、名乗なのりをかけて打たねばならぬ。——左近はこう咄嗟とつさに決心すると、身仕度をする間も惜しいように、編笠をかなぐり捨てるが早いか、「瀬沼兵衛せぬまひょうえ、加納求馬かのうもとめが兄分、津崎左近が助太刀すけだち覚えたか。」と呼びかけながら、刀を抜き放つて飛びかかった。が、相手は編笠をかぶったまま、騒ぐ気色もなく左近を見て、「うろたえ者め。人違いをするな。」と叱りつけた。左近は思わず躊躇ちゆうちゆうした。その途端に侍の手が刀の柄前つかまえにかかったと思うと、重ね厚かさあつの大刀が大袈裟おおげさに左近を斬り倒した。左近は尻居に倒れながら、目深まぶかくかぶった編笠の下に、始めて瀬沼兵衛の顔をはつきり見る事が出来たのであった。

二

左近さこんを打たせた三人の侍は、それからかれこれ二年間、敵兵かたきよう衛えの行く方ゆえを探えつて、五畿内ごきないから東海道をほとんど隈くまなく遍歴した。が、兵衛の消息は、杳ようとして再び聞えなかつた。

寛文かんぶん九年の秋、一行は落ちかかる雁かりと共に、始めて江戸の土を踏んだ。江戸は諸国の老若貴賤ろうにやくきせんが集まつている所だけに、敵の手がかりを尋ねるのにも、何かと便宜が多そうであつた。そこで彼等はまず神田の裏町うらまちに仮の宿を定めてから甚太夫じんたゆうは怪しい謡うたいを唱つて合力ごうりきを請う浪人になり、求馬もとめは小間物こまものの箱を背せ

お負つて町家を廻る商人に化け、喜三郎は旗本能勢惣右衛門へ年期切りの草履取りにはいった。

求馬は甚太夫とは別々に、毎日府内をさまよつて歩いた。物慣れた甚太夫は破れ扇に鳥目を貰いながら、根気よく盛り場を窺いまわつて、さらに倦む気色も示さなかつた。が、年若な求馬の心は、編笠に憔悴した顔を隠して、秋晴れの日本橋を渡る時でも、結局彼等の敵打は徒労に終つてしまいそんな寂しさに沈み勝ちであつた。

その内に筑波風しがだんだん寒さを加え出すと、求馬は風邪が元になつて、時々熱が昂ぶるようになった。が、彼は悪感を冒しても、やはり日毎に荷を負うて、商に出る事を止めなかつた。

甚太夫は喜三郎の顔を見ると、必ず求馬のけなげさを語つて、この主しゆう思しいの若党の眼に涙を催させるのが常であつた。しかし彼等は二人とも、病さえ静に養うに堪えない求馬の寂しさには気がつかなかつた。

やがて寛文十年の春が来た。求馬はその頃から人知れず、吉原くるわの廓わに通い出した。相あいかた方かたは和泉屋いずみやの楓かえでと云う、所いわゆるさんちやしょ謂い散さん茶ちや女郎ろうろうの一人であつた。が、彼女は勤めを離れて、心から求馬のために尽した。彼も楓のもとへ通つてゐる内だけ、わずかに落莫とした心もちから、自由になる事が出来たのであつた。

渋谷しよがやの金こん王おう桜ぎんくらの評判へいぱんが、洗せん湯とうの二階にがいに賑にぎわう頃、彼は楓の真心まごころに感じて、とうとう敵かたきうち打うちの大事だいじを打ち明けた。すると

思いがけなく彼女の口から、兵衛らしい侍が松江藩まつえの侍たちとしよに、一月ひとつきばかり以前和泉屋へ遊びに来たと云う事がわかった。幸さいわい、その侍の相方あいかたの籤くじを引いた楓は、面体めんていから持ち物まで、かなりはつきりした記憶を持つていた。のみならず彼が二三日中うちに、江戸を立つて雲州うんしゅう松江へ赴おもむこうとしている事なぞも、ちらりと小耳こみみに挟んでいた。求馬は勿論喜んだ。が、再び敵打の旅に上るために、楓と当分——あるいは永久に別れなければならぬ事を思うと、自然求馬の心は勇まなかつた。彼はその日彼女を相手に、いつもに似合わず爛醉らんすいした。そうして宿へ帰つて来ると、すぐおびただに夥しく血を吐いた。

求馬は翌日から枕についた。が、何故なぜか敵かたきの行方ゆくえが略ほぼわかつた

事は、一言も甚太夫には話さなかつた。甚太夫は袖乞いに出る合
 間を見ては、求馬の看病にも心を尽した。ところがある日暮ふきや
 屋町の芝居小屋などを徘徊はいかいして、暮方宿へ歸つて見ると、求
 馬は遺書を啣くわえたまま、もう火のはいつた行燈あんどうの前に、刀を腹
 へ突き立てて、無残な最後を遂げていた。甚太夫はさすがに仰ぎよう
 天てんしながら、ともかくもその遺書を開いて見た。遺書には敵の
 消息じしんと自刃じじんの仔細しさいとが認したためてあつた。「私わたくし儀ぎ柔にゆう弱じやく多病に
 つき、敵打の本懐も遂げ難きやに存ぜられ候そうろうあいだ間……」――
 これがその仔細の全部であつた。しかし血に染んだ遺書の中には、
 もう一通の書面が巻きこんであつた。甚太夫はこの書面へ眼を通
 すと、おもむろに行燈をひき寄せて、燈とうしん心の火をそれへ移した。

火はめらめらと紙を焼いて、甚太夫の苦い顔を照らした。
 書面は求馬が今年ことしの春、楓かえでと二世にせの約束をした起請文きしょうもんの一枚であつた。

三

寛文かんぶん十年の夏、甚太夫じんだゆうは喜三郎きさぶろうと共に、雲州松江の城下へはいつた。始めて大橋おおはしの上に立つて、宍道湖しんじこの天に群むらつてい
 る雲の峰を眺めた時、二人の心には云い合せたように、悲壯な感
 激が催された。考えて見れば一行は、故郷の熊本を後にしてから、
 ちようどこれで旅の空に四度目の夏を迎えるのであつた。

彼等はまず京橋きょうばし 界限かいわいの旅籠はたごに宿を定めると、翌日からすぐ例のごとく、敵の所在を窺い始めた。するとそろそろ秋が立つ頃になって、やはり松平家まつだいらけの侍ふでんりゆうに不伝流ふでんりゆうの指南しゅんぱんをしている、おんちこざえもん恩地小左衛門と云う侍の屋敷に、兵衛ひょうえらしい侍のかくまわられている事が明かになった。二人は今度こそ本望が達せられると思つた。いや、達せずには置かないと思つた。殊に甚太夫はそれがわかつた日から、時々心頭に抑え難い怒と喜を感じずにはいられなかつた。兵衛はすでに平太郎へいたろう一人の敵かたきではなく、左近さこんの敵でもあれば、求馬もとめの敵でもあつた。が、それよりも先にこの三年間、彼に幾多の艱難なを嘗なめさせた彼自身の怨敵おんてきであつた。——甚太夫はそう思うと、日頃沈着な彼にも似合わず、すぐさま恩地の屋

敷へ踏みこんで、勝負を決したいような心もちさえた。

しかし恩地小左衛門は、山陰さんいんに名だたる剣客であつた。それだけにまた彼の手足しゆそくとなる門弟の数も多かつた。甚太夫はそこで惴はやりながらも、兵衛が一人外出する機会を待たなければならなかつた。

機会は容易に來なかつた。兵衛はほとんど昼夜とも、屋敷にとじこもつてゐるらしかつた。その内に彼等の旅籠はたごの庭には、もうひやくじつこう百日紅の花が散つて、踏石ふみいしに落ちる日の光も次第に弱くなり始めた。二人は苦しい焦燥の中に、三年以前返り打に遇つた左近の祥月しょうげつ命日めいじつを迎えた。喜三郎はその夜、近くにある祥光しょうこう院いんの門を敲たたいて和尚おしょうに仏事を修して貰つた。が、万一おもんばかを慮つ

て、左近の俗名ぞくみょうは洩もらさずにいた。すると寺の本堂に、意外にも左近と平太郎との俗名を記した位牌いはいがあつた。喜三郎は仏事が終つてから、何気なにげない風よそおを装つて、所化しよけにその位牌ゆかりの由縁を尋ねた。ところがさらに意外な事には、祥光院の檀家たる恩地小左衛門のかかり人びとが、月に二度の命日には必ず回向えこうに來ると云う答があつた。「今日も早くに見えました。」——所化は何も気がつかないように、こんな事までもつけ加えた。喜三郎は寺の門を出ながら、加納かのう親子や左近の靈が彼等に冥助みょうじよを与よせているような、氣強さを感じずにはいられなかつた。

甚太夫は喜三郎の話を聞きながら、天運の到來を祝すと共に、今まで兵衛の寺詣てらもうでに氣づかなかつた事を口惜くちおしく思つた。

「もう八日経てば、大檀那様の御命日でございます。御命日に敵が打てますのも、何かの因縁でございましょう。」——喜三郎はこう云つて、この喜ばしい話を終つた。そんな心もちもちは甚太夫にもあつた。二人はそれから行燈を囲んで、夜もすがら左近や加納親子の追憶をさまざま語り合つた。が、彼等の菩提を弔つてゐる兵衛の心を酌む事などは、二人とも全然忘却してゐた。

平太郎の命日は、一日毎に近づいて来た。二人は妬刃を合せながら、心静にその日を待った。今はもう敵打は、成否の問題ではなくなつてゐた。すべての懸案はただその日、ただその時刻だけであつた。甚太夫は本望を遂げた後の、逃き口まで思い定めていた。

ついにその日の朝が来た。二人はまだ天が明けない内に、あんど行燈うの光で身仕度をした。甚太夫は菖蒲革しょうぶがわの裁付たつつけに黒くろ紬つむぎの袷あわせを重ねて、同じ紬の紋付の羽織の下に細い革たすきの襷たすきをかけた。差さ料しりょうは長谷部則長はせべのりながの刀はに来国俊らいくにとしの脇差わきざしであつた。喜三郎も羽織は着なかつたが、肌はだには着込みを纏まとつていた。二人は冷ひやざ酒けの盃はを換かわしてから、今日までの勘定をすませた後、勢いきほいよく旅籠はたごの門かどを出た。

外はまだ人通りがなかつた。二人はそれでも編笠あまがさに顔を包んで、兼ねて敵打の場所と定めた祥光院しょうこういんの門前かどへ向つた。ところが宿しゆくを離れて一二町行くと、甚太夫は急に足を止めて、「待てよ。今朝けさの勘定しもんは四文釣銭しもんが足らなかつた。おれはこれから引き返し

て、釣銭の残りを取って来るわ。」と云った。喜三郎はもどかしそうに、「高たかが四文のはした銭ぜにではございませんか。御戻りになるがものはございますまい。」と云つて、一刻も早く鼻の先の祥光院まで行つていようとした。しかし甚太夫は聞かなかつた。

「鳥ちようもく目は元より惜しくはない。だが甚太夫ほどの侍も、敵打の前にはうろたえて、旅籠の勘定を誤つたとあつては、未まっだい代までの恥辱になるわ。その方は一足先へ参れ。身どもは宿まで取つて返そう。」——彼はこう云い放つて、一人旅籠へ引き返した。喜三郎は甚太夫の覚悟に感服しながら、云われた通り自分だけ敵打の場所へ急いだ。

が、ほどなく甚太夫も、祥光院の門前に待っていた喜三郎と一

しよになつた。その日は薄雲が空に迷つて、朧おぼろげな日ざしはありながら、時々雨の降る天気であつた。二人は両方に立ち別れて、棗なつめの葉が黄ばんでいる寺の堀へいそと外を徘徊はいかいしながら、勇んで兵衛の参詣を待つた。

しかしかれこれひる午近くなつても、未いまだに兵衛は見えなかつた。喜三郎はいら立つて、さりげなく彼の参詣の有無を寺の門番に尋ねて見た。が、門番の答にも、やはり今日はどうしたのだから、まだ参られぬと云う事であつた。

二人は惴はやる心を静めて、じつと寺の外に立っていた。その間には用捨なく移つて、やがて夕暮の色と共に、棗の実を食はみ落すからす鴉からすの聲が、寂しく空に響くようになった。喜三郎は氣を揉もんで、

甚太夫の側へ寄ると、「一そ恩地の屋敷の外へ参つて居りましようか。」と囁いた。が、甚太夫は頭かしらを振つて、許す気色けしきも見せなかつた。

やがて寺の門の空には、這はい塞ふさがつた雲の間に、疎まぼらな星影がちらつき出した。けれども甚太夫は塀へいに身を寄せて、執しゅう念ねく兵衛を待ち続けた。實際敵を持つ兵衛の身としては、夜更よふけに人知れず仏参をすます事がないとも限らなかつた。

とうとう初夜しよやの鐘が鳴つた。それから二更にこうの鐘が鳴つた。二人は露に濡れながら、まだ寺のほとりを去らずにいた。

が、兵衛はいつまで経つても、ついに姿を現さなかつた。

大団円

甚じん太だ夫ゆう主従は宿を変えて、さらに兵衛ひょうえをつけ狙った。が、その後ご四五日すると、甚太夫は突然真夜中から、烈しい吐瀉としゃを催し出した。喜三郎きさぶろうは心配の余り、すぐにも医者を迎えたかったが、病人は大事の洩れるのを惧おそれて、どうしてもそれを許さなかつた。

甚太夫は枕に沈んだまま、買い薬を命に日を送った。しかし吐瀉は止まなかつた。喜三郎はとうとう堪え兼ねて、一応医者しの診脈んみやくを請うべく、ようやく病人を納得させた。そこで取りあえず旅籠はたごの主人に、かかりつけの医者を迎えて貰った。主人はすぐ

に人を走らせて、近くに技ぎを売っている、松木蘭袋まつきらんたいと云う医者を呼びにやった。

蘭袋は向井靈蘭むかいれいらんの門に学んだ、神方しんぼうの名の高い人物であつた。が、一方また豪傑肌ごうけつはだの所もあつて、日夜杯さかずきに親みながらさらに黄白こうはくを意としなかつた。「天雲あまぐもの上をかけるも谷水をわたるも鶴つるのつとめなりけり」——こう自ら歌みづかつたほど、彼の薬を請うものは、上かみは一藩の老職から、下しもは露命つなも繋ぎ難い乞食こじき非人ひにんにまで及んでいた。

蘭袋は甚太夫の脈をとつて見るまでもなく、痢病りびょうと云う見立てを下くだした。しかしこの名医の薬を飲むようになつてもやはり甚太夫の病は癒なおらなかつた。喜三郎は看病かたわらの傍、ひたすら諸もろもろ々の

仏神に甚太夫の快方を祈願した。病人も夜長の枕元に薬を煮る煙を嗅ぎながら、多年の本望を遂げるまでは、どうかして生きていたいと念じていた。

ますます

秋は益深くなつた。喜三郎は蘭袋の家へ薬を取りに行く途中、群を成した水鳥が、屢空を渡るのを見た。するとある日彼は蘭袋の家の玄関で、やはり薬を貰いに來ている一人の仲間ちゆうげんと落ち合つた。それが恩地小左衛門おんちこざえもんの屋敷のものだと云う事は、蘭袋の内弟子うちでしと話している言葉にも自ら明かであつた。彼はその仲間が歸つてから、顔馴染かおなじみの内弟子に向つて、「恩地殿のような武芸者も、病には勝てぬと見えますな。」と云つた。「いえ、病人は恩地様ではありません。あそこに御出でになる御客人です。」

一人の好きそうな内弟子は、無頓着にこう返事をした。

それ以来喜三郎は薬を貰いに行く度に、さりげなく兵衛の容子ようすを探った。ところがだんだん聞き出して見ると、兵衛はちようど平太郎の命日頃から、甚太夫と同じ痲病のために、苦しんでいると云う事がわかった。して見れば兵衛が祥光院へ、あの日に限つて詣もつでなかつたのも、その病のせいに違いなかつた。甚太夫はこの話を聞くと、一層病苦に堪えられなくなつた。もし兵衛が病死したら、勿論いくら打ちたくとも、敵かたきの打てる筈はなかつた。と云つて兵衛が生きたにせよ、彼自身が命を墜おとしたら、やはり永年の艱難は水泡に帰すのも同然であつた。彼はついに枕まくらを噛かみながら、彼自身の快癒を祈ると共に、併せて敵瀬沼兵衛かたきせぬまひょうえの快癒も祈

らざるを得なかつた。

が、運命は飽くまでも、田岡甚太夫に刻薄こくはくであつた。彼の病は重おもりに重つて、蘭袋らんたいの薬を貰つてから、まだ十日と経たない内に、今日か明日かと云う容態ようたいになつた。彼はそう云う苦痛の中にも、執念しゅうねく敵打かたきうちの望を忘れなかつた。喜三郎は彼の呻しん吟んぎんの中に、しばしば八幡大菩薩はちまんたいぼさつと云う言葉がかすかに洩れるのを聞いた。殊にある夜は喜三郎が、例のごとく薬を勧めると、甚太夫はじつと彼を見て、「喜三郎。」と弱い声を出した。それからまたしばらくして、「おれは命が惜しいわ。」と云つた。喜三郎は畳へ手をついたまま、顔もたを擡もたげる事さえ出来なかつた。

その翌日、甚太夫は急に思い立つて、喜三郎に蘭袋を迎えにや

つた。蘭袋はその日も酒気を帯びて、早速彼の病床を見舞った。

「先生、永々の御介抱、甚太夫辱く存じ申す。」——彼は蘭袋の

顔を見ると、床の上に起直おきなつて、苦しそうにこう云った。「が、

身ども息のある内に、先生を御見かけ申し、何分願いたい一儀が

ござる。御聞き届け下さりようか。」蘭袋は快く領うなずいた。すると

甚太夫は途切れ途切れに、彼が瀬沼兵衛をつけ狙ねらう敵打の仔細しさいを

話し出した。彼の声はかすかであったが、言葉は長物語の間にも、

さらに乱れる容子ようすがなかった。蘭袋は眉をひそめながら、熱心に

耳を澄ませていた。が、やがて話が終ると、甚太夫はもう喘あえぎな

がら、「身ども今こんじよう生の思おもい出には、兵衛の容態ようたいが承うけたまわりとう

ござる。兵衛はまだ存命でござるか。」と云った。喜三郎はすで

に泣いていた。蘭袋もこの言葉を聞いた時には、涙が抑えられな
 いようであつた。しかし彼は膝を進ませると、病人の耳へ口をつ
 けるようにして、「御安心めされい。兵衛殿の臨終は、今朝寅の
 上刻じようこくに、愚老確かに見届け申した。」と云つた。甚太夫の顔
 には微笑が浮んだ。それと同時に窶やつれた頬ほおへ、冷たく涙の痕あとが見
 えた。「兵衛——兵衛は冥みよう加がな奴でござる。」——甚太夫は口
 惜ちおしそうに呟つぶやいたまま、蘭袋に礼を云うつもりか、床の上へ乱れ
 た頭かしらを垂れた。そうしてついに空しくなつた。……

寛文十年陰曆いんれき十月の末、喜三郎は独り蘭袋に辞して、故郷
 熊本へ帰る旅程のぼに上つた。彼の振分けふりわの行李こうりの中には、求馬左近
 甚太夫じんだゆうの三人の遺髪がはいつていた。

後談

寛文十一年の正月、雲州松江祥光院の墓所には、
 四基の石塔が建てられた。施主は緊く秘したと見えて、誰も知つ
 ているものはなかつた。が、その石塔が建つた時、二人の僧
 形が紅梅の枝を提げて、朝早く祥光院の門をくぐつた。

その一人は城下に名高い、松木蘭袋に紛れなかつた。もう一
 人の僧形は、見る影もなく病み耄けていたが、それでも凜々しい
 物ごしに、どこか武士らしい容子があつた。二人は墓前に紅梅の
 枝を手向けた。それから新しい四基の石塔に順々に水を注いで行

った。
……

後年おうぼくえりん黄檗慧林の会下えかに、当時の病み耄けた僧形とよく似寄つ
た老衲ろうのうし子しがいた。これも順じゆんかく鶴かくと云う僧そうみよう名なのほかは、何
も素性すじようの知れない人物であつた。

(大正九年四月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年12月1日第1刷発行

1996（平成8）年4月1日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第二卷」筑摩書房

1971（昭和46）年4月5日初版第1刷発行

初出：「雄弁」

1920（大正9）年5月

入力：j.utiya

校正：かとうかおり

1999年1月12日公開

2017年6月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

或敵打の話

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>